

黛まどか著「引き算の美学 もの言わぬ国の文化力」毎日新聞社 2012年2月25日刊を読む

引き算の美学 もの言わぬ国の文化力

1. 型と床運動

- (1) 外国人に「型」を理解してもらうのに、最も効果的だったのが、体操競技の床運動を例に挙げての説明だった。
- (2) 床運動には 12 メートル四方の枠があり、その線からはみ出ると減点となる。かといってそれを恐れて真ん中ばかり使っても動きが小さくなり、ダイナミックで美しい演技はできない。枠ぎりぎりに演技をする。例えば対角線上にバック転をしてゆき、最後の後ろ足がぼとっとコーナーぎりぎりの内側に落ちた時の美しさは、枠があってこそその緊張感とそれゆえの華やぎであり、枠がない状態でした時には、それほどの美しさは出ないだろう。選手たちはむしろ枠を利用してより美しい演技をしているのだ。
- (3) 俳句も同様で、型つまり床運動における枠があるからこそ、その枠の中で言葉が跳躍し、飛翔する。言葉がぴたりと型にはまった時は、床運動におけるバック転の最後の一足がコーナーぎりぎりに着地した時と同じ効用をもたらすのである。

2. 型の自由

- (1) 茶道は型の集合である。道具はすべて置く場所が決まっています、自分がやりやすいように勝手に動かしてはいけません。もちろん手順もすべて決まっています。初心者の方はそれを不自由と感じるが、鍛錬を積んでいくと、やがて決められた型の中で茶を点てるのが最も動きやすく且つ美しいということに気づくという。
- (2) 2011年2月、パリに能楽師の安田登氏と笛方つきたくさとしの槻宅聡氏をお招きして、公開鼎談「能・俳句、省略の極みに生まれるもの」を行った。俳句ではない他の日本文化からの視点で、「型の自由」の話をしたと思ったのだ。安田氏は能の舞を例に次のように語った。「能の舞台というのは約 6 メートル四方の小さな舞台です。そこで、例えば『羽衣』という演目では、天女が天に昇っていく様を舞います。しかし舞台という制限があるので、能ではただ四角い舞台をグルグル回る。もしこれが制限がなかったら、たぶん、宙吊りなどしてどんどん上に昇っていくというふうに表現することになります。そうすると必ず天井というあらたな制限が出てきてしまう。ところが、ただ舞台をグルグル回ることによって、お客さんの想像力で無限の天を創造してもらおうわけです」。
- (3) 俳句も「有季定型」という制限によって、舞台で言う宙吊りのような直接的な表現はできないし、解説を添えることもできない。しかし季語のように重層的な意味を含む言葉や、「切れ」を入れることにより、わずかな言葉が読み手の想像力を掻き立て、余白に無限のイメージを膨らませることができる。

(4) 槻宅氏は「笛」を使って型の話をしてくださった。

「私の吹いている能管というのは非常に特殊な笛で、この笛の構造そのものが制限であり、型であると思います。……私の笛は、師匠から譲り受けたものですが、300年くらい前のものです。最初に吹いた時、吹きにくくて、自分が出したい音に近づいたなと思えるまでに十数年近くかかりました。ただ、私は自分の出したい音に近づいてきたと思っていましたが、周りの人に聞くと、私の音が師匠の音に近づいてきていると言うのです。ということは、300年誰かが吹き続けてきた笛は、そういうふうにして前の人の、さらに前の人の音を、次の人が受け継いでいくのだと思うのです。そう思った時、すごく自由になった気がします。これはある意味で自分が消滅してしまうことだと思うのです」。

(5) 笛は多くの笛方によって吹かれていくうちに、道具の継承だけでなく、音の継承、もっと言えば笛の魂の継承をしているということではないだろうか。人が笛を吹くのではなく、笛に吹かされている。笛が求める型に音が適ったとき、良い音が出る。多くの人を介して長い年月を吹き続けられるうちに、それぞれの笛方の魂が宿り、さらにそれは笛そのものの魂となって音を出す。笛の声と言ってもいい。型を通して、笛方と笛の間に揺るぎない信頼があればこそ生まれるのだろう。

(6) 「日本の詩歌の七五調(五七調)」も、笛に譬^{たと}えることができるのではないだろうか。千年二千年と詠み継がれる中で先人たちの魂が宿り、七五調という笛そのものに既に日本人の太古からの魂の声、魂の調べのごときものが宿っており、いにしえ人の魂と相呼応しながら、私たちは今日を詠んでいるのだ。

(7) 俳句における「型」は、日本における詩の発生から、長い時を経て辿り着いたフォームである。時には言葉は「型」の中で予測不可能な働きをし、作者の思考さえ超えて無制限に跳躍する。「型」を信頼し、「型」の力を借りて自由になるということにおいては、能も俳句も共通している。

3. 「型」は「思い」の冷凍保存

(1) また、安田氏は、「型」は、普段私たちがなかなか到達できない「心」の深い層にある「思い」に到達するための手段であると説く。例えば、ある役を演じるのに、「その人物がどんな思いであるか」などということは考えず、ひたすら師匠から教わった型を舞台上で演じるだけなのだそう。

(2) 「心」は「心変わり」という言葉があるように変化するものだが、「思い」はそのもっと深くにあって変化しない。例えば、好きになる対象が変わっても、「好きになる」という部分は変わらない。「心」を生み出す元の部分、これが「思い」だと氏は言う。「もし能が『心』を扱っていたら、650年も続かなかったはずです。……だが、どんなに『心』が変わっても、人の『思い』の部分というのは、そんなに変わらない。その『思い』を表現するのが能なのです。しかし、演じる僕たちは『心』を持っている人間ですから、この『思い』を表現することはかなり難しい」

- (3) 人生には「思い」に到達できる瞬間が何度かある。例えば、大切な人をなくしたときなど、人はその「思い」に到達する。それをある時、先人たちが「型」というものの中に押し込めたと言うのだ。
- (4) 「私たちが、『型』を学んで舞台の上で演じるということは、その冷凍保存されたものを解凍していくような作業なのです。その『思い』が解凍されて、『観客の中にある思い』とリンクして、演者も観客も普段は気づいていなかった、ある『思い』が芽生えてくる。『型』というのは、ただ『形』^{かたち}というのではなく、そういう普段は気がつかないような思いに根ざした深いものだと思うのです」
- (5) 俳句を始めるきっかけが、肉親の死だったり、失恋だったり、という人が多い。深い悲しみや喪失感を抱えたとき、日頃はなかなか辿り着けない「思い」に至り、そして、その「思い」を形にする「型」のような信頼できるものを、手操り寄せているのではないだろうか。
- (6) 揺れ動く「心」は、沈んで動かない「思い」とパラレルにある。俳句も「心」を描くものではなく、その奥にある「思い」を描く。しかも目の前の自然に託して「思い」は直接言葉にはしない。自然を媒介として「思い」に到達するのだ。

P101 ~ 106

<コメント>

正岡子規により「俳句は文芸」とされて以来、様々な努力、取り組みにより、日本文化の代表の一つにまで成長した俳句。フランスを中心にヨーロッパ各国での俳句を通じた日本文化の普及に努める俳人、黛まどかさんの「引き算の美学」。2011年3月11日の東日本大震災「もの言わぬ国の文化力」がサブテーマ。異国での活動を通して見えてきた日本の潜在能力とは何か。俳句とは世界に誇る日本文化そのものであることがよくわかります。ぜひ御一読を。

2019年6月28日(金)

林 明 夫